

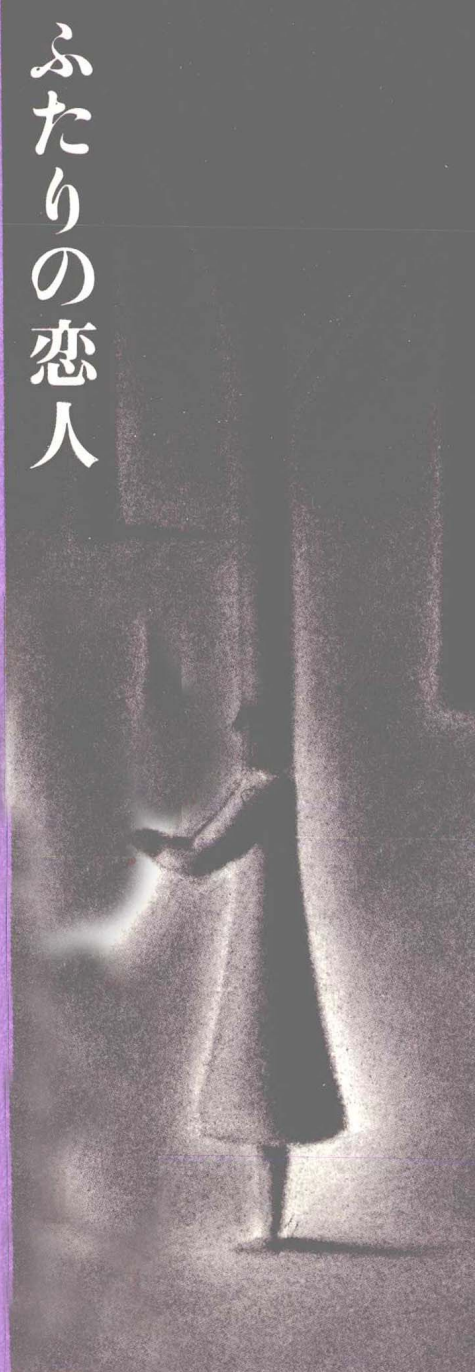
ふたりの恋人

赤川次郎



ふたりの恋人

赤川次郎



赤川次郎（あかがわじろう）

1948年2月29日福岡県生まれ。

1976年、『幽霊列車』で、文藝春秋「第15回オール讀物推理小説新人賞」を受賞。著書に『吸血鬼はお年ごろ』シリーズ、『三次元の殺人』（以上、集英社）、『三毛猫ホームズ』シリーズ（光文社）など多数がある。

ふたりの恋人

1996年3月30日 第1刷発行

著 者 赤川次郎

編 集 株式会社 創美社

発行者 坂口紀和

発行所 株式会社 集英社

〒101-50 東京都千代田区一ツ橋2-5-10

電話 編集部 (03)3230-6268

販売部 (03)3230-6393

制作部 (03)3230-6080

印刷所 凸版印刷株式会社

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。
本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1996 Jirō Akagawa, Printed in Japan

ISBN4-08-609035-X C0093

目次

7	逃	亡	の	旅	121	
6	顔	の	な	い	女	102
5	葬	儀	の	後	83	
4	秘	密	65			
3	海	辺	の	死	45	
2	殺	意	32			
1	旧	友	15			
	プ	ロ	ロ	グ	7	

⑧ 残されたチャンス……………141

⑨ 疑惑……………158

⑩ 殺人者……………177

⑪ 現われた顔……………197

⑫ 真相……………217

エピソード……………227

あとがき……………236

装丁

装画

高原 宏デザイン事務所

高原 宏 + 十河一郎

谷口周郎

ふたりの恋人

プ ロ ロ ー ゲ

その車は、大邸宅を取り囲む高い塀の外に止まっていた。

赤——燃えるような色のスポーツカー。ポルシェ928だ。夜の暗がりの中でも、その美しい車体は浮き立って見える。

その座席で、ふたりはキスしていた。

「——もう行かなきゃ」

唇が離れると、若者の方が言った。

「もう？」

娘の方は不満気である。

「まだ九時じゃないの」

「十時までにもどらないとうるさいんだ」

と若者は言って、

「なにしろぼくは電車で帰るんだからね。ポルシェに乗るわけじゃない」と笑った。

「送って行くわよ」

と娘はハンドルに手を置いた。

「いや、いいよ。こんなすごい車で乗り付けたら、下宿の連中、目を回すさ」

「分かったわ」

娘はあきらめた、というように息をついて、

「じゃ、今度はいつ会える？」

「そうだなあ……。今週いっぱいアルバイトで忙しいし……。来週の土曜なら」

「十日もあるじゃないの」

「仕方ないさ。アルバイトを休んだら即座にクビなもの」

「やめちゃいなさいよ」

「そんなわけには行かないよ。じゃ、来週の金曜日の晩に電話するからね」

と若者はドアを開けて出ようとした。

「待って！」

娘は相手の腕をつかんで引きもどすと、

「十日も会えないのなら、もう一度……」

と唇を寄せて行った。

娘の名は関口麗子。せきぐちれいこ父親は四つの企業の社長を兼ねている関口石文だ。いしぶん——ひとり娘の麗子

が、どんなにわがまま勝手に育っているかは、十八歳の誕生日のプレゼントが、このボルシェ

だということでも分かる。

相手の若者は、麗子の身なりに比べると、だいぶくたびれたツイードの上着、下は丸えりのスポーツシャツという、いさかみすばらしい格好だ。——名を水田^{みずた}信一^{しんいち}と言った。

「じゃ、行くよ」

信一が外へ出ると、

「待って」

と麗子がもう一度呼び止めた。

「なんだい？」

とのぞき込むと、麗子がハンドバッグから無造作に一万円札を数枚つかみ出した。

「これ、持って行って」

と信一の方に差し出す。

「おい、それはやめてくれよ」

と信一は首を振った。

「なんだかきみにたかってるみたいじゃないか、それじゃ」

「いいじゃないの、そんなこと」

「そうは行かないよ。ぼくだってちゃんと働いてるんだからね」

「私のためにあげるのよ」

「え？」

「もっと上等な服を着てちょうだい。一緒に歩いてみずと気が楽なもの」

信一は自分のくたびれた服と靴を見下ろして頭をかいた。

「分かったよ」

と肩をすくめて、金を受け取ると、

「必ず返すからね」

「ほかのもので返してちょうだい」

と麗子は言つてウインクしてみせると、エンジンをかけた。低くうなつて、ポルシェが身震いする。

「じゃ、電話待ってるわよ」

「ああ。おやすみ」

信一はドアを閉めた。麗子は信一にほほえみかけて、それからポルシェをスタートさせた。

信一は、赤いポルシェの尾灯が高い塀の角を曲がって見えなくなるまで見送つて、それからニヤリと笑つた。

さつきポケットへねじ込んだ一万円札を取り出して一枚ずつ、ていねいにしわをのばして重ねる。四枚あつた。

財布へ金をしまひ込むと、信一は腕時計を見た。

「もう九時十分か……」

信一は、夜の道を急いで歩き出した。

新宿駅しんじゅくに着いたのは、九時四十分だった。西口を出て、地下広場からまっすぐに中央公園へ向かう。

超高層ビルの谷間を歩いて行くせいか、風が強く吹きつけて来る。——たぶん中央公園へ行くらしいカップルを何組か追い越し、公園へはいる歩道橋を駆け上って、やっと少し足をゆるめた。

「九時五十分か……」

と腕時計を見て、

「このくらい待たせてちょうどいいんだ」

とひとり言を言った。そして悠々とした足取りで公園へとはいって行った。

日比谷公園ひびやと並んで、ここもカップルの名所である。この時間ともなると、ベンチはどれもカップルで満席の状態。

信一は、肩を寄せ合ったり、抱き合ったりしているカップルたちの間を抜けて歩いて行った。——こんな場所にひとりでいることくらいさ、まににならない光景もあるまい。

いつものベンチのあたりへ来て、見回していると、背後に小走りの足音がした。

「信一さん」

相川広美あいかわひろみが立っている。

「待たせちゃって、悪かったね」

「ううん、いいのよ」

「立って待ってたのかい？」

「いいえ。でも、この辺、混んでるもんだから、あっちの方にすわってたの」

相川広美は関口麗子の正反対といってもいいような娘だった。麗子の、華やかな、人目をひく個性に比べると、全く地味で、目立たない。紺のスカートに白のブラウス、黒いセーターという、まるで白黒写真のようないでたちだった。

ふたりはベンチの所まで来た。

「あら、もうほかの人が……」

「まあいいさ」

信一は広美を促して、木の間を抜けて、芝生へ腰を下ろした。

「お店の方はどうだい？」

「ええ、なんとかやってるけど……」

と広美は言葉をにごした。

「あまり楽しくなさそうだね」

「私、ぶきつちよでしょう。よくお皿や茶碗を落とすのよね。それで怒られてばかりよ」

「聞き流しとけばいいのさ」

「ええ、叱られるのは平気。ただね、こわした分のお皿や茶碗の代金をお給料から引かれるの」

「そりゃひどいな！」

「仕方ないわ。いやなら辞めろ、ですもの、向こうは」

「ちっとも給料なんかよくないくせに」

「でもほかの働き口を探すのは大変なもの。我慢しているわ。早くお皿を割らないように練習して……」

「大変だなあ、きみも」

「そうね……でも、きっとそのうちいいこともあるわ」

広美はほほえんだ。芝生の暗がりの中でも、その笑顔の輝きは分かった。

「そうだとも。いいことがあるよ」

そう言いながら、信一は広美を抱き寄せてキスした。広美が彼の腕の中で小さく震えた。

「いいことがあったわ。——いまね」

と広美は言った。信一はポケットから財布を出し、一万円札を一枚抜いた。

「さあ、これ。暮らしの足しにしてくれよ」

「悪いわ、いつも……」

「そんなに気にしなくていいよ。ちゃんと稼いだ金なんだからな」

「だから気になるのよ」

そう言いながら、広美は結局信一の手から一万円札を受け取って、ハンドバッグへしまった。

「いつもごめんなさい」

「いいさ、もう忘れろよ」

「アルバイト、忙しいの？」

「うん……。あまり休みが取れないんだ。もっと会えるといいんだけどね」

「無理しないで」

「きみ、今夜は……。急ぐの？」

広美はちょっと信一の目から視線をそらして、

「いいえ、べつに」

とかすかな、囁くような声で言った。

「ぼくのアパートへ来るかい？」

信一の言葉に、広美はしばらく顔を伏せたまま答えなかった。それからゆっくり顔を上げてうなずいた。

「行くわ」

信一は広美の手を取って立ち上がった。西口の方へ、歩道橋をもどって行くと、まだこれやらやって来るカップルが何組もすれ違って行った。

さっきより一段と風が強くなったように思えた。